

チベット族の村の比較から婚姻を観る

——雲南省迪慶藏族自治州徳欽県の事例から——

六鹿 桂子

1 はじめに

婚姻は民俗学の重要な研究領域の一つである。婚姻形態や風俗習慣が意味するものをそれが存在している社会、すなわち地域や家族との関わりから考察したいと思う。チベット族の婚姻形態には一夫一婦婚・一夫多妻婚・一妻多夫婚がある。ほとんどの場合、男女が1対1で結婚する一夫一婦婚である。しかしながら一夫多妻婚や一妻多夫婚もその数は僅かではあるが存在する。現在においてもこのような不均衡な結婚をしている人々が生活しているところがある。その理由を探るべく、本論文ではチベット族の一妻多夫婚に焦点をあてて、調査をおこなった村について述べる。本研究では一妻多夫婚が多くおこなわれているという中国雲南省迪慶藏族自治州徳欽県にある村での調査をもとに、チベット族の2つの村の比較から、その村の村民の婚姻形態を考察する。どちらもチベット族の村であり、チベット族の風習が色濃く残っている。ゆえにその2つの村の村民は同じような婚姻形態をとっていると考えられるが、実際にはこの2つの村には異なった婚姻形態が存在している。この2つの村の事例をもとに、チベット族の一妻多夫婚がどのような状況のもとで存在するのかを考察する。

2 先行研究と問題点

チベット族の婚姻形態のひとつである一妻多夫婚についての研究で、このような婚姻形態をおこなう理由として、合田(1988, 241)は以下の6点を挙げている。(1)財と労働力の分散を防ぐことができる。(2)兄弟が分業(牧畜・商業など)をおこなうのがチベット族の一般的な労働形態であり、妻を共有し同居することで、経済的にも協力することができる。(3)兄弟のうち誰かが放牧や商用で留守にしても妻は安心していられる。(4)父系氏族の結束が維持される。(5)婚資の支払いが多いために兄弟それぞれに妻を娶ることが困難であった。(6)兄弟が同居しそれぞれ妻を娶ると、この妻たちが互いに嫉妬して争うことが多い。兄弟的多夫一妻婚では、こうした問題が起こらない。また古くは河口慧海が一妻多夫制の発生原因を「チベットは瘦せた国なので、兄弟めいめいに妻を持つことになると、財産を分配せねばならぬので、このような習慣が仏教のはいる前から形成されていたように思われる」(河口1978, 94)と、述べている。経済的理由から一妻多夫婚という婚姻形態がとられているとしているが、それだけではないと述べる研究もある。陸(1991, 33)は「同一の父母から生まれた子供が一緒に成長するのが最大の幸福である、とされている。家族内では、(嫁

が一人なので) 嫂と弟嫁どうしのいさかいといったようなことはみられず、一家は睦まじい」として父系血縁共同体的な団結のためにこのような結婚をするとしている。

一妻多夫婚という婚姻形態は現在においてもとられているのであろうか。もしとられているとすればどのような理由からで、またとられていない場合にはなぜ一妻多夫婚をやらないのであろうか。さらには、中国では1950年に婚姻法が制定され、1980年と2001年に改正された。その婚姻法の規定では一夫一婦婚を原則としているが、法律の面からは一妻多夫婚をどのようにとらえているのか。これらの点に着目して、調査をおこなった2つの村の比較をもとに、一妻多夫婚が存在する状況の考察を試みる。

3 調査地域の概況

雲南省迪慶藏族自治州は、雲南省の西北部に位置し、四川省、チベット自治区と境を接している(東経98°37分～100°23分、北緯26°57分～29°12分)。面積は23870平方キロメートルあり、自治州内は香格里拉県⁽¹⁾、徳欽県、維西県の3県からなる。本論文の調査地は徳欽県にある。徳欽県には1990年の時点でチベット族・リス族・ナシ族・白族・イ族・タイ族・ヌー族・プミ族・ラフ族・漢族・ハニ族・ミャオ族・壮族など13の民族が暮らし、総人口は58658人であり、少数民族の総人口は57790人で全体の98.5%を占める。その中でもチベット族は総人口の81%を占めている。徳欽県は8つの鎮からなり⁽²⁾、その中の1つの鎮であるB鎮の中に5つの行政村、さらにその下に78の自然村がある。5つの行政村の一つである、B行政村⁽³⁾には22の自然村があり、本論文の調査地である2村はこの自然村の中に属す。B行政村的総面積は1245平方キロメートルである。昔からこの地域は“茶馬古道”東線の主要中継地点である。現在では香格里拉県からチベット自治区の境まで延びている国道214号の沿線上にある。B行政村的中心には商店や市場、招待所などが集まっている商業地域があり、徳欽県の県城から106km、香格里拉県の県城からは82km、昆明からは787km、チベット自治区ラサまでおよそ1300kmの位置にあり、標高は2025mある。この地域の年平均気温は14℃～16℃、最高気温36℃、最低気温-7.4℃、年間降水量373.9mmで、5月～10月までの降水量が年間降水量の93.7%を占める(普2005, 264-274)。

B行政村的主な生業は農業で、標高の高い所では農業と牧畜業を営んでいる。主な農作物は小麦・チンクー(裸麦)・トウモロコシで、その他に家庭で各種野菜・豆類・芋類が作られている。多くの場合、農作物は自家消費している。また経済林としてサクランボ・リンゴ・胡桃がある。2003年からブドウ栽培を始めた村もあるが、ブドウ栽培は採算の取れている所とそうでない所に分かれ、あまり多くの場所ではおこなわれていない。

この地域を調査地に選んだ理由は、チベット族の人口比率がほぼ100%に近く、漢族を含め、他の民族の人口が少ない。従って、この地域のチベット族が自分たち固有の風俗習慣を守り続けることができ、それゆえにこの地域であれば一妻多夫婚が存在すると考えたからである。漢族がこの地域にあまり入ってこなかった原因の1つとして、以下のような事実が残っている。「1936年5月6日に中国工農紅軍は長征の途上で中甸県の上橋頭で徳欽県の

東竹林寺の僧侶やチベット族の部族長が率いる武装した地方の反動勢力の攻撃を受け、紅軍は敗れた。そこで徳欽県方面への北上を余儀なくあきらめなければならなかった。従って徳欽県へは進行せず、四川省の得榮へと進んでいった」という経緯があるので（雲南省中甸県地方志編纂委員会 1997, 271-274）、古くから徳欽県への漢族の進入は少なかったと思われる。このことから徳欽県のいくつかの鎮にはチベット族が多く、チベット族の伝統的な風習が残っている。とりわけ B 鎮を含む 2、3 の鎮で一妻多夫婚が多いといわれている（徳欽県志編纂委員会 1997, 335）。

4 2 村の概況

本研究の調査地である 2 村、j 村と g 村について、地理的・経済的概況並びに 2 村の村民の家族構成と婚姻形態について述べる。

4.1 地理的概況

j 村は B 行政村の中心から香格里拉県の県城方面へ 2km 行った所に位置する村である。国道 214 号の沿線にあり、村の中へも車で入ることができるほど交通の便が非常に良い。標高 2025m の村である。

g 村は j 村からさらに香格里拉県の県城方面へ 12km 行った所に位置する村である。B 行政村の中心からは 14km ある。やはり国道 214 号沿いにある村で、国道は g 村を貫く形で通っている。2 村とも国道の沿線沿いにあるが、j 村の方が B 行政村の中心に近いだけ生活面では便利である。g 村の標高も j 村と同じ 2025m である。

4.2 経済的概況

2 村とも主な生業は農業であるが、収穫した農作物はすべて村民が各家で自家消費しており、市場に出していない。2 村の村民が保有している土地は、j 村では村民一人あたり 0.8 畝（約 533 m²）分配されているが、正確に言えば、良い土地を 0.5 畝と良くない土地を 0.3 畝で合わせて 0.8 畝である。j 村の平均家族数は 5 人であるので、1 戸あたり平均 4 畝（約 2667 m²）保有していることになる。g 村では村民一人あたり 0.9 畝（約 600 m²）である。g 村は平均家族数が 5.5 人と j 村よりやや多い。従って 1 戸あたり平均 4.95 畝（約 3300 m²）保有していることになる。収穫物による現金収入はないので、2 村の主な収入源は以下のようである。

j 村の村民は、トラックによる運搬の仕事に携わっている⁽⁴⁾。徳欽県で鉱石の採掘が始まった 2004 年 5 月からトラックによる運搬の仕事をする人が増えた。2006 年 5 月現在、j 村の 1 戸を除くすべての家庭でトラックを所有している。収入は 2 年前に比べて 2 倍になり、j 村の 1 戸あたりの平均年収は 4 万元（約 60 万円）である。村民の中で最も収入の多い人で年間 10 万元あまり、少ない人でも 1、2 万元の収入があり、トラックを所有しないで、

人に雇われている人で、4000 元の収入がある。この村から出稼ぎに出ている村民はいないが、その他に、煉瓦づくりをしている家⁽⁵⁾や 1 戸だけではあるが、B 行政村の中心に招待所を開業している村民もいる⁽⁶⁾。また j 村の畑は日当たりが大変良いが、2003 年から始めたブドウ栽培は、2 戸のみがやっている⁽⁷⁾。

g 村では j 村のようにトラックの仕事やバスの仕事に携わっている村民は 8、9 人（総人口 132 人中）である。やはり出稼ぎに出ている村民はいない。その他の村民は、松茸採取で現金収入を得ている。B 行政村の村々では、毎年 7 月中旬～10 月まで山へ松茸を採りに行き、それを現金化する。松茸採取で得られる収入は 1 戸あたり平均 3、4000 元（約 45000 円～6 万円）である。最も多い家でも 5000 元ほどである。またブドウ栽培は、g 村では 1 戸のみがやっている。やはり採算が合わないので、次第に減って行って、1 戸のみになってしまった。収入面では上記の点からみると、j 村と g 村とでは明らかに j 村の方が裕福であるといえる。また 2 村の家屋などからもそれはわかる。その上 j 村では山へ松茸を採りに行く村民はいない。それはトラックによる収入が十分にあるからである。

4.3 村民の人口と家族構成

j 村の総人口は 131 人で、男女比率が男：女 = 100：107.94 で、女性の数が若干多い。村の中で最も多いのは、10 代の女性である。総世帯数は 26 戸である。核家族が村の 3 分の 1 以上を占めている。j 村で注目すべき点は、新居住の村民が 14 戸あり、そのうち分家している村民が 10 戸（38.5%）である。j 村では以前から分家が頻繁におこなわれている。j 村の村民の経済力がこのようなことを可能にする状況にある。また j 村は B 行政村の中心に近いので、生活面でも交通の面でも非常に便利であり、かつこの村の土地は日当たりがよく、肥沃であるので、よその村から j 村に引っ越してきたいと願う村民がいる。残る 4 戸はよその村から引っ越してきた村民である。このような新居住の家が村の半分以上（53.8%）を占める。

g 村の総人口は 132 人で、男女比率が男：女 = 100：94.12 と g 村は女性の方が少ない。g 村でも 10 代の女性が一番多かった。この点は 2 村以外の村でもみられた現象である。理由としては、男性は出家しラマ僧となって村を出て寺で暮らすようになる人がいることや、女性は進学する人が少なく、中学を卒業するか或いは中退して家の手伝いをするので、村に残る率が多い。g 村の総世帯数は 24 戸で、j 村と比べると、総人口は 1 人多いが、世帯数は 2 戸少ない。（表 1-1）からわかるように、1 戸あたりの平均家族数が g 村の方が多くなる。そして（表 1-2）からわかるように、村の約 4 分の 3 が直系家族で、また三世代家族である。このことから若干ではあるが、j 村の方が g 村より核家族化しているといえる。その上調査した家に関していえば、g 村には j 村でみられたような分家して、新たに家を建てた村民はいない。

—チベット族の村の比較から婚姻を観る—

(表 1-1) j 村と g 村の村民概況

村	総人口(人)	男女数(人)	男女比率	総世帯数(戸)	平均家族数(人)
j 村	131	男 63 女 68	100 : 107.94	26	5.04
g 村	132	男 68 女 64	100 : 94.12	24	5.5

(表 1-2)

村	核家族(戸)	直系家族	拡大家族	その他	一世代	二世代	三世代	四世代
j 村	9 (34.6%)	15 (57.7%)	1 (3.8%)	1	1	9 (34.6%)	13 (50%)	3 (11.5%)
g 村	6 (26.1%)	17 (73.9%)	0	1	0	6 (26.1%)	17 (73.9%)	0

(出所) 2006 年の調査による。

4.4 村民の婚姻形態

j 村には 38 組の夫婦がいる。村民は村外婚が多く、B 行政村の隣村出身者と結婚している人が多い。婿入りも多い。その 38 組はすべて一夫一婦婚である。現在村には 1 組のイトコ婚(母方交叉イトコ婚)がいる。j 村では 18、9 年前にはイトコ婚をする人が多かった。しかし、イトコ婚をすると劣性遺伝による身障者が生まれる危険性があるとの理由から、現在ではこのような結婚をしない方がよいと指導されており、その数が減ってきたのである。

j 村には現在一妻多夫婚や一夫多妻婚をしている夫婦はいない。ただ兄弟型一妻多夫婚は 1900 年代初め頃に 1 組だけあった。姉妹型一夫多妻婚も 1980 年頃をしていた村民はいたが、現在その村民は、その姉妹の中の一人と一夫一婦婚の形で結婚している。つまり j 村では以前から一妻多夫婚や一夫多妻婚という婚姻形態がおこなわれてこなかったわけである。j 村で一妻多夫婚がおこなわれてこなかったことは、この村に分家した村民が多いことと関係があると考えられる。j 村では以前から分家が頻繁におこなわれてきた。村民の中には 4 人の息子それぞれに家を建ててやって、分家させたという例もある。分家が頻繁におこなわれれば、一妻多夫婚は少ないはずである。

j 村の村民に一妻多夫婚という婚姻形態についてどう思うか聞いたところ、「非常に羨ましいと思うが、兄弟や夫婦の仲が悪くなったら、いやである」と、答えた。このことから、村民自身は一妻多夫婚という婚姻形態に対して悪い印象を持っていないことがわかる。しかしながら j 村で一妻多夫婚が存在しない理由は、このような婚姻形態がとられてこなかったからである。すなわち一妻多夫婚をする風習がなかったからで、それは分家がさかんにおこなわれていたことが影響していると思われる。

g 村では現在においても一妻多夫婚がおこなわれている。g 村には調査できなかった 1 家庭を除き、38 組の夫婦がいる。その中で一夫一婦婚が 28 組 (73.7%)、兄弟型一妻多夫婚が 9 組 (23.7%)、姉妹型一夫多妻婚も 1 組 (2.6%) いる。一妻多夫婚家庭は 8 戸で、そのうち親の世代と息子の世代でそれぞれが一妻多夫婚をおこなっている家が 1 戸含まれている。さらにその家の親の世代では、三兄弟で一人の妻を娶っている。その他の一妻多夫婚をして

—チベット族の村の比較から婚姻を観る—

いる村民は、二人兄弟で一人の妻と結婚している。以前は一妻多夫婚をしている人は、7、8組であったが、現在の方が若干多くなっている。それは一妻多夫婚を望む人がこの村には多いからであると村民はいう。

g村に現在存在する兄弟型一妻多夫婚は、1961年～2000年までにおこなわれたもので、その妻達はすべてg村以外の村の出身者である。9人の妻のうち、隣の村であるz村の出身者が3人、山の上に位置するc村出身者が2人、他の4人はg村周辺の村の出身者である。また妻達は10代で嫁いできた人が3人、20代前半が5人、20代後半が1人であった。さらに9組すべてが結婚当事者の親が決めた結婚であった。なぜ一妻多夫婚をしたかについて村民に尋ねたところ、一夫一妻婚と全く同じ認識で結婚をしていて、単に夫が一人か二人かぐらいの違いしかないという答えであった。従ってg村の村民にしてみれば、一妻多夫婚は特殊な婚姻形態であるという意識は全くないのである。だからこそ以前からずっとおこなわれ続けており、その結果として現在も存在しているのである。

(表2) j村とg村の村民の婚姻形態

村	夫婦総数	夫方居住	妻方居住	新居住	一夫一婦婚	一夫多妻婚	一妻多夫婚
j村	38組	7戸 (26.9%)	4戸 (15.4%)	14戸 (53.8%)	38組 (100%)	0	0
g村	38組	18戸 (75%)	5戸 (20.8%)	0	28組 (73.7%)	1組 (2.6%)	9組 (23.7%)

(出所) 2006年の調査による。

5 g村の一妻多夫婚の事例

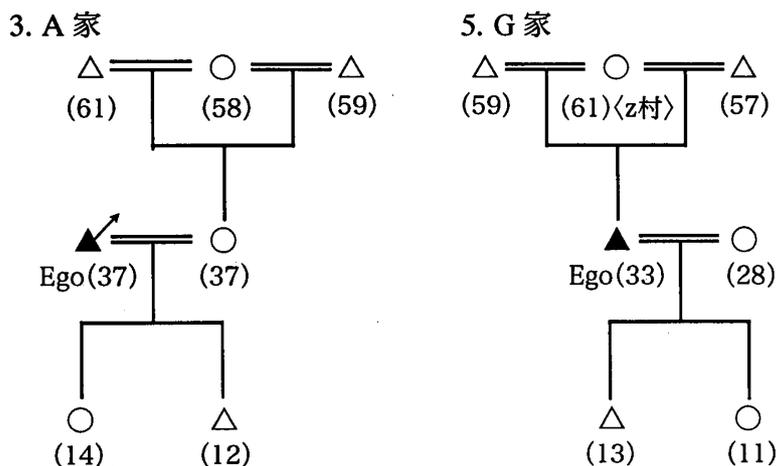
g村で聴き取りによって一妻多夫婚に当たる事例として調査し得たのは、8戸9組の夫婦である。この9組とも兄弟による一妻多夫婚である。g村では以前から一妻多夫婚がおこなわれており、数の上で大きな変化はない。すなわちg村では一妻多夫婚が慣習として定着していて、一夫一婦婚と同様におこなわれている。

そこでg村に現在存在している一妻多夫婚を3タイプに分類して考察しようと思うが、あえてこのように類型化するのは、類型化することが本来の目的ではなく、類型化することで、その婚姻の構造的な把握と各家族の特質を見いだすためである。

[事例1] 世帯主の親の世代で一妻多夫婚をおこなっている夫婦 (2組)

A家は三世代の7人家族である。この家の一妻多夫婚夫婦は1968年に結婚した。その妻は20歳の時に嫁いできた。G家も三世代の7人家族で、この家の一妻多夫婚夫婦は1972年に結婚した。その妻は27歳の時にg村の隣の村から嫁いできた。

—チベット族の村の比較から婚姻を観る—



(図1) A家とG家の家族構成

(注) 各事例の番号は、参照資料のg村村民の家族状況の表内の村民番号である。

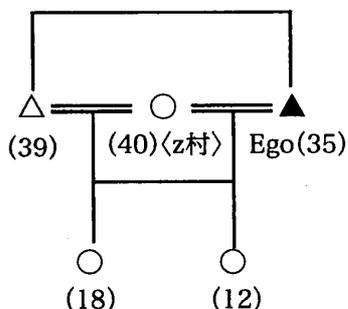
[凡例]

△男性 ○女性 =結婚 一兄弟姉妹 () 年齢 <> 出身地
 △↗ 婿入り

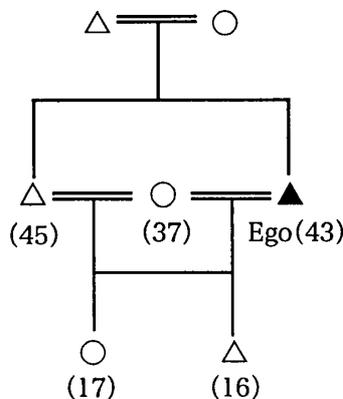
[事例2] 世帯主が一妻多夫婚をしている夫婦 (5組)

この5組は1987年～2000年に結婚している。B家は二世代の5人家族である。この家の世帯主は1987年に結婚した。その妻は21歳の時に隣の村から嫁いできた。D家は三世代の7人家族である。この家の一妻多夫婚夫婦は1988年に結婚した。妻は19歳で嫁いできている。W家は三世代の7人家族である。W家の一妻多夫婚夫婦は1992年に結婚し、その妻は24歳で嫁いできた。Q家も三世代の7人家族である。Q家の夫婦も1992年に結婚した。その妻は山の上にある村の出身で、21歳で嫁いできた。L家は三世代の6人家族である。この家はg村の中で最も新しい一妻多夫婚の夫婦である。彼らは2000年に結婚した。やはりその妻は隣の村から19歳で嫁いできている。

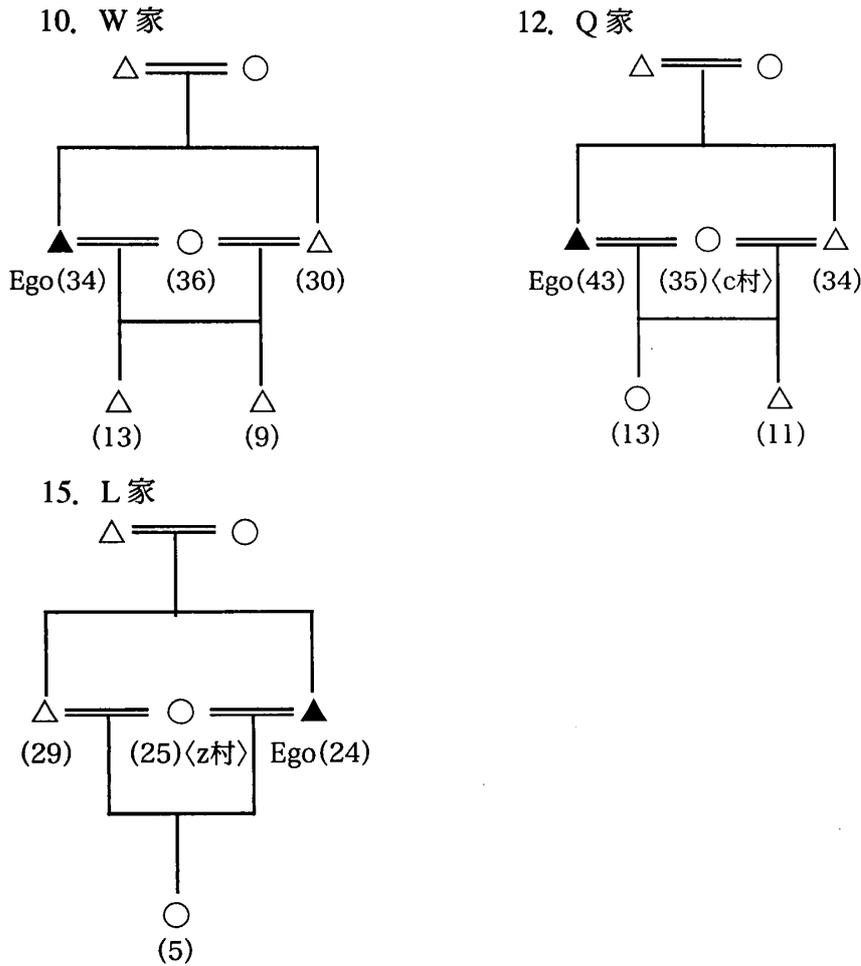
18. B家



1. D家



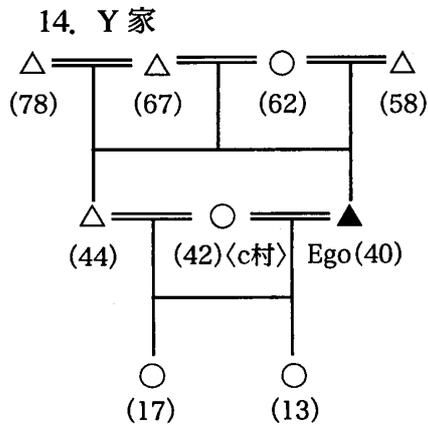
—チベット族の村の比較から婚姻を観る—



(図2) B家、D家、W家、Q家、L家の家族構成

[事例3] 2組の一妻多夫婚夫婦がいる家庭

Y家は三世代の9人家族で、親の世代と息子の世代でそれぞれが一妻多夫婚をしている。親の世代は三兄弟で一人の妻を娶っている。その妻は17歳で嫁いできた。親の世代は1961年に結婚し、現存するg村の一妻多夫婚夫婦の中で最も古い夫婦である。息子の世代は1988年に結婚した。息子達の妻は山の上にあるc村の出身で、24歳の時に嫁いできた。



(図3) Y家の家族構成

以上g村の一妻多夫婚夫婦をみてきた。g村では、1970年代初め以前より、1980年代後

半以降に一妻多夫婚をおこなう夫婦が多かった。このように g 村では以前から一妻多夫婚がおこなわれてきた。それは村民が一妻多夫婚を一夫一婦婚と同じような認識でとらえており、2つの婚姻形態の違いは、夫が一人か二人かの違いぐらいしかないとし、一妻多夫婚が特殊な結婚ではないと考えているからである。このことからわかるように一妻多夫婚は g 村に定着した婚姻形態であり、ゆえに現在においてもおこなわれ続けているのである。

6 まとめ

以上、一妻多夫婚が存在しない j 村と存在する g 村との比較から、チベット族の一妻多夫婚がどのような状況のもとで存在するのかについて考察してきた。ともに国道沿いにある 2 村の距離は 12km しか離れていないが、j 村では以前から一妻多夫婚はおこなわれておらず、その反対に g 村では以前から一妻多夫婚がおこなわれてきており、現在も存在している。この 2 村を比較したところ、村の人口面からは 2 村はほとんど差がない。ただ調査したところ j 村は女性が多く、g 村は女性が少ないという結果が出た。しかしながら女性の多い少ないということは、直接的には一妻多夫婚の有無に関係するとはいえない。それは筆者が B 行政村にある他の村を調査したときに、女性の多い村でも少ない村でも一妻多夫婚をしていたからである。

一妻多夫婚がおこなわれていることは、その村に一妻多夫婚という婚姻形態が定着しているか否かによる。すなわち g 村では一妻多夫婚が一夫一婦婚と同じようにおこなわれてきた。それは村民の認識の中でこの 2つの婚姻形態があまり違いがないと考えていることにある。よって以前からおこなわれ、現在もおこなわれ続けている。それだけ一妻多夫婚が村に根付いていることを意味している。では、j 村はというと、j 村でも 100 年ほど前に 1 組だけ一妻多夫婚夫婦がいたが、その後は全くない。すなわち j 村にはこのような婚姻形態は定着しなかったわけである。j 村では、以前から分家が頻繁におこなわれてきた。息子達が結婚するときにそれぞれが嫁を娶って、親から土地や家屋、家畜などを分け与えられる。このような状況において、兄弟で 1 人の女性を妻にする一妻多夫婚をおこなうことは考えなかったのである。よって j 村の村民は一妻多夫婚という婚姻形態をとってこなかったと思われる。j 村の村民自体は一妻多夫婚について羨ましい婚姻形態であるという良い印象を持っているので存在しても不思議ではないが、j 村では以前からこのような婚姻をしてこなかったため、現在も一妻多夫婚をしない。このように一妻多夫婚という婚姻形態が存在する、しないかは、以前から一妻多夫婚をしてきか、してこなかったかということに大きく影響する。j 村と g 村の村民の婚姻形態を考察する限りにおいては、それぞれの村に以前から一妻多夫婚をする風習があるかないかが大きな原因であり、そして j 村に一妻多夫婚が存在しなかったことは、j 村自体の経済力がこのような婚姻形態をとる必要がなかったためであると考えられる。

また婚姻法の原則は一夫一婦婚であって、一妻多夫婚や一夫多妻婚は許されていない。村民はこの法律について認知しているが、それでも g 村では 2000 年に最も新しい一妻多夫婚夫婦が生まれているのは、以前からおこなわれてきている婚姻形態であって、慣習の方を重

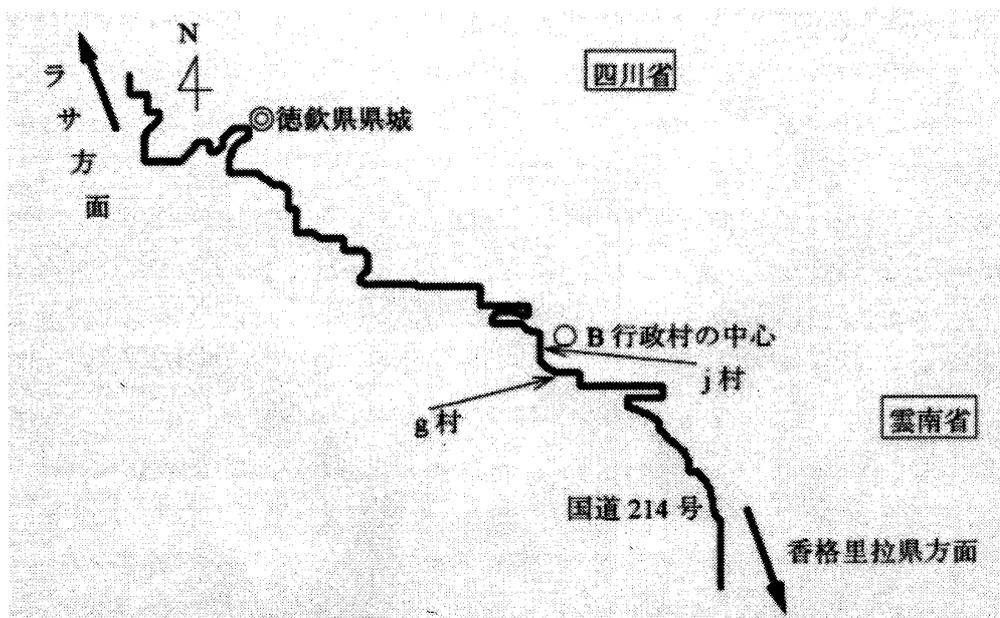
—チベット族の村の比較から婚姻を観る—

視していると考えられる。

今後の課題としては、チベット族の一妻多夫婚はその婚姻形態は変化がないが、その婚姻形態が存在する環境というものは変化してきているといえる。一妻多夫婚が存在する環境がどのように変化してきたかについて考察を試みたい。

【参照資料】

(図4) j村とg村の地理的位置



(出所) 徳欽県志編纂委員会編 (1997) 『徳欽県志』雲南民族出版社

(表3) j村村民の家族状況

村民	家族数 (人)	男女数 (人)	世帯	家族構成	夫方・妻方居住	婚姻形態
1	5	男3 女2	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
2	7	3 4	四	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
3	8	3 5	四	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
4	7	4 3	四	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
5	3	2 1	二	核家族	新居住 (分家)	一夫一婦婚
6	3	1 2	二	核家族	新居住 (分家)	一夫一婦婚
7	5	2 3	三	直系家族	新居住 (分家)	一夫一婦婚
8	4	2 2	二	—	—	—
9	4	2 2	二	核家族	新居住 (分家)	一夫一婦婚
10	4	2 2	二	核家族	新居住 (分家)	一夫一婦婚
11	5	2 3	三	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
12	4	2 2	二	核家族	新居住 (分家)	一夫一婦婚
13	4	2 2	二	核家族	新居住 (分家)	一夫一婦婚
14	5	3 2	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚

—チベット族の村の比較から婚姻を観る—

15	6	3 3	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
16	8	3 5	三	拡大家族	妻方居住	一夫一婦婚
17	5	4 1	三	直系家族	新居住	一夫一婦婚
18	6	4 2	三	直系家族	新居住 (分家)	一夫一婦婚
19	6	3 3	三	直系家族	新居住	一夫一婦婚
20	6	2 4	三	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
21	5	2 3	三	直系家族	新居住	一夫一婦婚
22	2	1 1	一	核家族	新居住 (分家)	一夫一婦婚
23	4	1 3	二	核家族	新居住	一夫一婦婚
24	3	2 1	二	核家族	新居住 (分家)	一夫一婦婚
25	6	2 4	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
26	6	3 3	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚

(出所) 2004年5月の調査による。

(注) 3は母方交叉イトコ婚である。

8は幼いときに両親を亡くし、離婚して戻ってきた姉と姉の子ども達と暮らしている。

(表4) g村村民の家族状況

村民	家族数 (人)	男女数 (人)	世代	家族構成	夫方・妻方居住	婚姻形態
1	7	男4 女3	三	直系家族	夫方居住	一妻多夫婚
2	5	2 3	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
3	7	4 3	三	直系家族	夫方居住	一妻多夫婚
4	5	1 4	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
5	7	4 3	三	直系家族	夫方居住	一妻多夫婚
6	7	3 4	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
7	6	3 3	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
8	4	3 1	二	核家族	夫方居住	一夫一婦婚
9	4	3 1	二	核家族	夫方居住	一夫一婦婚
10	7	5 2	三	直系家族	夫方居住	一妻多夫婚
11	5	2 3	三	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
12	7	3 4	三	直系家族	夫方居住	一妻多夫婚
13	4	1 3	二	核家族	妻方居住	一夫一婦婚
14	9	5 4	三	直系家族	夫方居住	二世代の一妻多夫婚
15	6	3 3	三	直系家族	夫方居住	一妻多夫婚
16	4	2 2	二	核家族	妻方居住	一夫一婦婚
17	4	2 2	二	核家族	夫方居住	一夫一婦婚
18	5	2 3	二	核家族	夫方居住	一妻多夫婚
19	5	3 2	三	直系家族	妻方居住	一夫多妻婚
20	6	2 4	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
21	6	4 2	三	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
22	5	2 3	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
23	7	5 2	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚

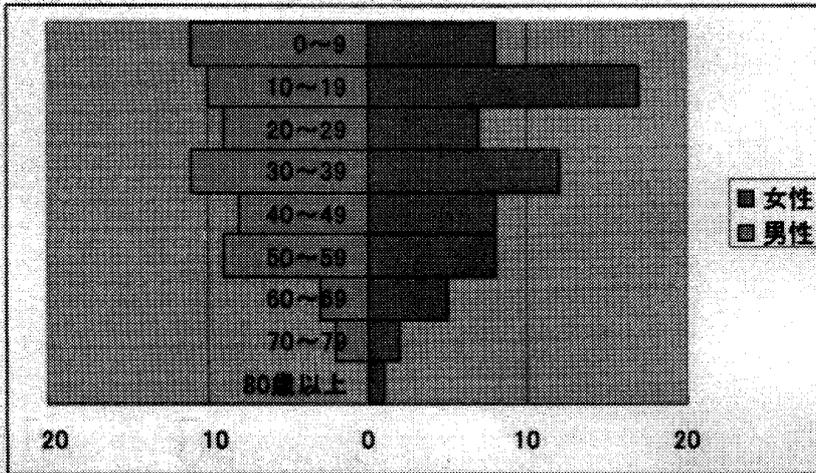
—チベット族の村の比較から婚姻を観る—

24	—	—	—	—	—	—
----	---	---	---	---	---	---

(出所) 2006年5月の調査による。

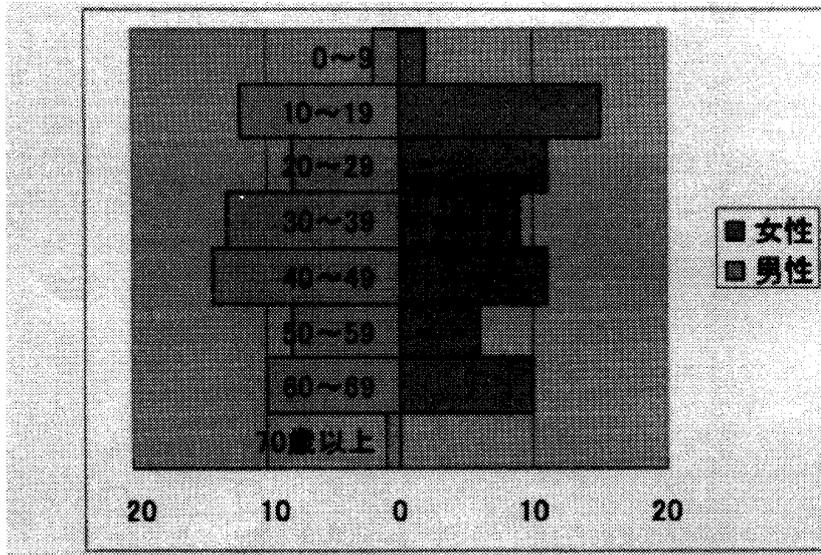
(注) 24については調査ができなかったが、6の家の長男を分家させた可能性が高い。

(表5) j村の年齢別男女人口



(出所) 2004年5月の調査による。

(表6) g村の年齢別男女人口



(出所) 2006年5月の調査による。

文献表

Westermark, Edward

1970 『人類婚姻史』江守五夫訳、社会思想社。

江守 五夫

1998 『婚姻の民俗——東アジアの視点から』吉川弘文館。

河口 慧海

1978 『チベット旅行記』白水社。

合田 涛

1988 『天帝の峰に挑む 東チベット——四川学術調査 3000 キロ』神戸新聞総合出版センター。

宋 兆麟

1990 『共夫制与共妻制』生活・読書・新知三聯書店上海分店出版。

徳欽県志編纂委員会（編）

1997 『徳欽県志』雲南民族出版社。

普魯華（主編）

2005 『香格里拉深处』雲南科技出版社。

林 超民（主編）

2003 『雲南郷土文化叢書・迪慶』雲南教育出版社。

陸 蓮蒂

1991 『婚姻からみた中国少数民族 上』江守五夫監訳、六興出版。

注

- (1) 2002年に中甸県から香格里拉県と名称が変わった。
- (2) 2003年以前は1つの鎮と7つの郷であったのが、2003年1月に郷が撤廃され、8つの鎮になった。
- (3) B鎮の総人口は8550人、1439戸で、そのうちチベット族は8356人で全体の97.73%を占めている（1990年時点）。
- (4) 徳欽県から四川省攀枝花市まで鉱石を運び、帰りに鉄材やセメントなどを運んでくる。1往復で10日間ほどかかり、中型トラックで3000元（45000円）ほどの純利益がある。

——チベット族の村の比較から婚姻を観る——

- (5) 煉瓦づくりをしている村民の話によると、1985年から煉瓦づくりを始めた。1回に3万個あまり作り、年間に4回窯で焼くので、年間に12万個作ることができるという。煉瓦の価格は1個あたり0.4元（約6円）で、12万個の価格は48000元（約72万円）になる。諸経費や人件費を差し引くと、およそ4万円ほどの収入になる。B村で最もたくさん煉瓦を作っている村民がj村に住んでいるが、その村民で年間の煉瓦による収入が7、80000元（約105万円～120万円）ある。
- (6) この家は2004年の元旦に招待所を開業した。建設費用は土地代を含み、90万元（約1350万円）あまりである。費用の半分の45万元は自己資金と親戚や友人から借りたもので、残りの半分は銀行のローンである。銀行ローンの利息は、1万元借りると1日2.5元（約38円）つく。この村民の招待所は、5月と10月のゴールドデンウィーク（黄金周）に満室になるのみで、年間の利益は1万元（15万円）ほどである。
- (7) ブドウ栽培をしている村民は1戸が4畝（約2667㎡）、もう1戸は2畝（約1333㎡）作っているだけである。採算が合わないのでブドウ栽培をする村民は少ない。

[本研究は平成18年度愛知大学国際中国研究センターのCOE研究助成の成果の一部である。]